巻頭言

「協同労働とアソシエーション」6月研究会を受けて、“協同労働”について考える

田嶋　康利
労協センター事業団

日本労協連の菅野理事長から、協同総研の今年度の第1回定例研究会の講師にと「田畑さん（大阪経済大学教授・哲学）に、講演を頼んでもらうことができないか」との依頼を受けて連絡を取ったところ、快く引き受けてくださり『協同労働とアソシエーション』をテーマに講演していただくことができた（講演内容は「協同の発見」8月号に掲載）。

田畑氏は、編著書『アソシエーション革命へ――理論・構想・実践』（社会評論社）の中で『ポスト・フォーディズムの資本主義はいくつかの特徴を示している。IT革命とグローバル化をベースに巨大資本の再編成が進む一方で、リストラ、省力化、外部化、雇用形態の多様化と不安定化、失業問題の深刻化などが見られる。未来型産業と呼ばれる情報やバイオは、家電や自動車のように大量の市民を雇用し丸抱えするような力を持っていない。他方で、サービス部門を中心に、地域密着型の「ヒューマンインタフェース領域」のニーズの拡大が見られる。地域経済への着目は資源循環型経済システムという観点からも強調されるようになった。これらの条件を背景に、地域密着型で**協同労働**を組織するという形で、市民が自発的に仕事と職場を創出する動きが顕著になりつつある。**協同労働**の実践的組織化は失業対策であると同時に、地域社会の再建であり、またオールタナティブな生活の実践でもある。これらの事態を背景に、在来型の消費生協やNPOと区別される「ワーカーズ・コレクティブ（労働者協同組合）」や「社会起業」の多様な形態が現在注目されている』と、協同労働の実践とその意義について述べている。

講演の中で、田畑氏はマルクスの文献（資本論）に触れ、「マルクスは『資本性的生産部門の内部では、均衡は不均衡から脱する不断の過程としてしか自分を表さない。というのはそこでは生産の連関は、盲目的法則として生産当事者たちに作用し、彼ら［生産当事者たち］が**アソシエートしたVerstand**として、その連関を共同のコントロールのもとに服属させていないからである』と述べている。マルクスは、この「生産当事者達のアソシエートしたVerstand（**生活者的知性**、思慮分別、理解力、悟性）」を、連合した協同組合諸団体が共同のプランに基づき全国的生産を調整する、この「共

同のプラン」の条件として位置付けている（フランスにおける内乱）」と「生活者的知性」（Verstand）に注目している。

また、アソシエートした生活者的知性の発揮のためには、「**相互にアソシエートした術（技）、アソシエーションのサイエンス（学）**」が必要であり、市民社会の中で、アソシエイティブデモクラシーに基礎を置いた「対抗的なヘゲモニー」「新しい未来を主張するような勢力」を現実のアソシエーションとして、組織をつくって、人や能力やお金や知恵や術、アート、そういうものを結集していかないとだめですよね。非常に長い長い時間をかけて新しい価値とか新しい生き方とか、新しい自己統治のあり方をつくりあげていくことが問われていると思います」と語られた。

私たち労働者協同組合は、協同労働（アソシエートした労働）を、相互孤立した者たちが働くことを通じての協同を創り出し、サービス利用者との協同、地域・地域社会との協同へと「働き方」を中心から周辺へと広げていく、人間的な労働として位置付け、その経営論としての基礎を「全組合員経営」と「共感の経営」に置いている（と思う）。また、協同労働の仕事論として「よい仕事」を定義し、この不断の追求を実践を通しての確立をめざしている。では、この協同労働の思想的な意味（側面）は何であるのか。「生産当事者たちが生活者的知性を発揮し、この知性を使うことで疎外を克服していくことができる」と田畑氏は述べた。協同労働における「**生活者的知性**」はどのようにすれば発揮できるのだろうか。

本来人間に備わっている潜勢力（潜在能力）を不断に発揮させうるような働き方、すなわち人間としての全面的な発達をめざす働き方を、生産当事者たち（組合員）が生活者的知性（市民としての当事者性に基づく知性）を不断に発揮する（自らが何者であるのかを自らに問う）ことで、相互アソシエートする「術」と「学」を身につけ、自らの成長・発達を自らの意志（喜び）として「体得する」（修得する）働き方」になるのであろうか。

そして、この新しい働き方（新しい生き方）を「全組合員経営」や「共感の経営」等の実践を通して修得（体得）し、仲間の協同から利用者の協同へ、そして地域の協同へと広げ、事業運動に関わるあらゆる市民や関係者の合意形成（市民社会の中の対抗的ヘゲモニー形成）の要件としていく「社会的な運動」の要素を持った労働と言えるのであろうか。

「協同労働」という働き方について、あらためてと考えさせられる講演であった。